2020年2月の行事予定表

1	土		16	日	礼拝式、青年・壮年・女性会の例会日
2	日	総員礼拝式(聖餐式)、教会役員会	17	月	2・11 集会の反省会 10:30(当教会)
3	月		18	火	教団・小年会(大橋会館)、18-19日
4	火		19	水	永松牧師は財政健全化委員会出席
5	水	聖書の学びと祈り会	20	木	祈祷会
6	木	祈祷会(証し会)、永松牧師「教団・財政委員会」出席	21	金	朝の祈り会
7	金	朝の祈り会	22	土	
8	土		23	日	礼拝式、伝道・教育・祈祷等の各部会
9	日	伝道礼拝(証し=遠藤姉妹)、奉仕の日	24	月	
10	月		25	火	
11	火	2・11 平和集会 13：30 日基・岡山講師・加藤俊英先生(兵庫教区・主事)	26	水	永松師、「財政健全化・検討委員会」出席
12	水	聖書の学びと祈り会	27	木	祈祷会
13	木	祈祷会	28	金	朝の祈り会、(市内教職連合会・総会)
14	金	朝の祈り会	29	土	
15	土				

２月お誕生・洗礼記念日の皆様、おめでとうございます。

編 集 後 記

◇ 歳が明けて直ぐ、榎本姉を天に送ることとなりました。長寿を祝う会でいつも面白いコメントをして私たちを笑わせてくださった姿が思い浮かびます。今の会堂を建てる中心となった世代をまた一人失うことになりました。

◇ ヘブル 12:1 「こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびただしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか」このみことばを思い返しました。

教 会 月 報

2020年2月

No.３４５

岡山ナザレン教会 月報編集委員会

イエス様の生涯

「　そこで、ヨセフは起きて、幼児とその母を連れて、イスラエルの地に帰って来た。・・・夢でお告げがあったので、ナザレという町に行って住んだ。『彼はナザレの人と呼ばれる』と預言者たちを通して言われることが実現するためであった。」マタイ福音書２：２１－２３

小生とナザレン教会についての出会いは、高校生時代でした。最初はどのような教会かと思いました。皆様も同様であったかもしれません。今や世界中で 150 カ国以上に宣教(伝道)しています。とはいえ、まだまだ日本国内での認知度は低く、当教会の看板でも赤字でわざわざキリスト教と書かざるを得ないところであります。しかし、イエス・キリストと記せば、誰もがよく知るところです。イエス・キリストの生涯の幼少～青年期について記したいと思います。イエス様の幼少期の記述は聖書のみならず、当時の時代考証に関する文書(ユダヤの記録や、ユダヤ戦記等を残した古文書、エジプトやギリシャ等の周辺国家の歴史書等)は極めて少数であるという状況です。さて、旧讃美歌 122 番「みどりもふかき」は礼拝式でよく歌われていますので、なじみの深い讃美歌かと思います。作詞者ユーステス・R・コンダーの父はイギリス出身で有名な作詞家ジョサイヤ・コンダーです。(15 番・われらのみ神は)原作者はロンドン大学を優秀な成績で卒業し、牧師として活躍され、エジンバラ大学からD.D.の学位を贈られました。この讃美歌は当初児童向けであったようですが、やがて一般に歌われました。内容は、自然に満ちた緑深い環境の下、心清らに行きかいつつ、育たれたイエスが、ナザレの村で青春を生きられたその情景が見えてくるようです。若き日、父ヨセフを支えられたイエスは「めぐみにおい、愛にかおる。み足のあとをわれはたどらん」と詠われるにふさわしいお方と言えます。(122 の訳詞者は国内では有名な由木康氏)　牧師　永松　清

2020 年の 1 月 1 日 11 時より新年最初の礼拝がもたれました。受付には S.N.兄。奏楽は奥さまがご奉仕くださいました。新年のメッセージはヨハネの福音書 16 章 33 節から「希望の源泉」と題して永松先生が語られました。例年のように普段来られない方や教会員の家族の方など、35 名ほどの方々が参加しました。新年は家族が集まるから一緒に教会に来るという、岡山ナザレン教会の慣例がこれからも続きますように！

M. E. 姉　天に召される

去る１月１２日（日）、昨年末より入院中だった M.E.姉（95 歳）が天に召されました。前夜式は１月１２日（日）午後７時より、告別式は１３日（月）午前 11 時半より執り行われ、遺族・親族・友人・教会員によるお別れの時を持ちました。喪主の長男 K 兄が「10 日ほどの入院期間だったでしょうか、こんなに長く母と一緒に居る時間は今まで無かったのではないかと思います。ストレートにものを言うので、父は大変だったなと思いましたが、今となってはその奔放さがかわいいと感じます。（略）朝日が昇るのと合わせるように静かに息を引き取りました。」とご挨拶され、会衆の涙を誘いました。遺影はお孫さんの撮影だそうです。

今年も恒例のお餅ピザが Y 兄・F 兄のご奉仕で 5 日（日）のお昼にふるまわれました。
お雑煮やお汁粉とは違う洋風の味も 2012 年から続き、すっかり教会の味となりました。

祭壇横のオブジェは長男K兄の作品です。題は「聖霊」。聖霊をあらわす手話の動きをもとにしたそうです。受洗した歳の作品とのこと。式の間、E姉の横におかれました。

１月伝道礼拝証し

S.O. 姉

「祈りは聞かれる」という私の体験から証しをします。

施設で転倒し大腿骨骨折し手術を受けた 80 歳代の叔母は、術後、鼻から経管栄養となり、その管を抜くという理由で両手にミトンをはめられ、ベッドの柵に縛られ、仰臥した状態が、もう１年以上続いています。

私は見舞うとすぐに両手を自由にし、欲しがるものをあげます。認知には多少問題がありますが、おしゃべり好きで、昔話や身内のことなど切れ目なく話します。私を見ると「来てくれたんか、ありがとう。」と満面の笑顔を見せます。けれど帰り際再びベット柵に手をくくり付けねばならない時、いつも私は怒りと悲しみで胸がしめつけられます。

家にいてもつらく、ある夜、私は涙ながら祈りました。「一日でも早く叔母さんを迎えに来てください。神様お願いします。」
そう祈った次に見舞うと叔母はリハビリ室で音楽リハに参加させてもらっていました。車イス姿も音楽リハも初めて知る機会でした。「伴奏つきで歌えて良かったね。」と私が言うと、顔をくしゃくしゃにして喜びました。私はその時ハッとしました。叔母さんは歌えることを喜んでいる。生きたいと願っている！と。私は叔母が、早く楽になるほうが良いと勝手に判断して祈りました。けれどそれは間違っていました。神様は私の祈りを聞いてくださらなかったのではなく、違う答え方で私に応答してくださったのだとその時悟りました。

フィリピの信徒への手紙4-6～7 に「何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあって守るであろう。」とあります。また、昨年 12 月 30 日の礼拝の「キリストにある生と死」というメッセージの中で「生も死も神の御手の中にある」と語られました。私の祈りは聞かれました。そして、平和の神様が深い愛をお示しくださいました。

礼拝を守ること、聖書を読むという信仰生活に立ち返りたいと思います。昨年から、私は、聖書を読破することを目標にしています。　今は、新約から旧約に読みを進めています。また、成人科の学びは教えられることが多く貴重な時です。私は、聖書を読む時の参考資料として、今まで購入してきた「希望誌」を整理し、新約と旧約に分けて一覧表を作りました。これを活用しながら毎日聖書を読もうと思っています。

（編集部要約）